

六花



2009

平成21年

俳句雑誌 りつか
chairman Yamada Rokko
secondary c. and the
editor in chief Kotori
cover designed by little bird

10月号

たん
丹

秋 灯

山田六甲

な
流れゆく秋の蛾鱗粉こぼさざる
ぜ
銭苔をばさつかせたる秋日かな
き
鱧釣の海の紺より竿を引く
ず
芋茎むく両手限界まで広げ
つ
衝立に戸板一枚芋煮会
い
傷みしを煮直して出す芋の膳
た
田に残る案山子に鴉来てとまる
の
野分中よろけては鶏走りけり



か 笠ずらし案山子の眉を上げ直す

お 遅れ咲く曼珠沙華あゝみづみづし

も 望月の中に筵を延べにけり

い 椅子出して繕ろひゐたる秋簾

だ だまし絵に親しみゐたる秋灯下

せ 鶺鴒の尾を擦り睦み合うてをり

な 鳴砂に浜昼顔の咲きゐたる

い 磯の香の中に始まる地藏盆

な
なぞりたる指に水面のなほ澄めり

ぜ
発条も錆びし時計の夜長かな

き
生真面目を取り繕うて新酒かな

ず
ずいと出る村の横綱宮相撲

つ
摘つまめよと誘ふかに菱咲きぬたり

い
稲妻やあかんぼピクリとして覚めず

た
松明の爆ぜて月へと散る火の粉

の
濃霧より浮き峙つる巖かな



か カンナかな曇れる昼にひらひらと

お 鷹揚に波打つものよ稔田は

も 杜に入る露湿りなる鳥居撫で

い 稲刈や畦の薬罐に傘被せ

だ 抱くやうに閉づやうにあり曼珠沙華

せ 鵲鴿の姿眩くらます日差しかな

な 南瓜のふくふくせるを選びにけり

い 色変へぬ松にてのひら添はせをり

沢蟹の畳を走る通夜かな

笹村 政子

さわがにのたたみをはしるつうやかな

ささむらまさこ

雨傘を茅の輪にあづけくぐりけり

干されたる烏賊のしづくの匂ひ来る

踏まれたる笠の白さよ梅雨茸

海光のまづ戻りたる梅雨の明け

笑うに笑えない場面。通夜式が
敵かに執り行われているところへ
突然畳の上を沢ガニが走る。参列
者は驚きながらも、笑いをこらえ、
気が付かないふりをして頭を垂れ
ている。しかし眼と耳は全員沢ガ
ニを追っているのだ。それだけで
充分。通夜は本来、死者を葬る前
に家族縁者、知人などが遺体側
で終夜守っていること。おつや、
とか夜伽と呼ばれる。最近では前
夜に仮葬儀の形式で執り行われる
ことが多い。掲句はその場面。つ
や、つうや、どちらも言う。

夏菊の強き姿にありにけり

筒井八重子

なつぎくにつよきすがたにありにけり

つついやえこ

百合の影壁に映して仏間の灯

風ゆくや片陰の道ゆつくりと

遠雷の音より高く鳥の声

露草の花美しく寂しかり

夏菊なればこそその強い主観が活きる。花の色は秋のものにやや劣るが茎は太く葉の緑は色濃い（『日本大歳時記』青柳志解樹）とあるように切り花としても出回る夏菊はまさに力強い。人間は暑さの中に体力を消耗し気持ちも萎えがちであるが、緑濃き茎の太さや葉の生き生きとした姿に力を授かり、いろいろの意味で夏を乗り切れそうな気がしてくる。まことに夏菊の特徴を簡潔に力強く言い切ったものだ。思い切りの良さが心地よく読者に響くのである。

水音に畳青みぬ夏館

K O K I A

みずおとにたたみあおみぬなつやかた こそあ

紅少し掛かりて白し松葉独活

うすものに漢方薬の匂ひかな

滑り台上つてみたる蟻の列

アマリリス大きすぎるとぼやく夫

水音によって畳が青むような涼しさを覚える、と言ったのが佳い。夏館は和・洋風を含めて、夏向きの装いをした家構え。海辺の別荘あるいは山荘といった感じの建物。風音や水音のする環境のよい避暑の建物らしさが、水音によっていっそう涼しさを増す。その雰囲気揭句から伝わり、そのような館で憩いたいと思わせる力がある。雪樹集三位ではあるがこの作品は捨てがたい。それについては主宰・副主宰、ともに全くの同意見であり、夢風撰に推薦した。

雪 卿 集

かぐや姫

梶浦玲良子

夕日まだ峠はなれず茄子の馬
竹の皮ひとつ齡とるかぐや姫
夏焚火よるべなきもの持ちよりて
蟻の荷のかるがるとゆく柳腰
麦秋の日のながながと太き脚

子 燕

木内美保子

白き胸張りて子燕巢立つ朝
青柚に爪立てて見る雨後の朝
梅雨茸の並ぶ小さき傘の列
岩裏にすべり消え行く山蜥蜴
畦暮れて藪蚊を連れて戻りけり

せつ じゅうしゅう
雪 樹 集

黒壁

出口誠

向日葵の太陽を背に咲きみたり
黒壁の旧家涼しきビル谷間
炎暑かな遠き車の屋根光る
パトカーに静寂^{しじま}破^{やぶ}らる夏の夜
朝顔の蕾ねぢれて尖りをり

かぶとむし

池崎るり子

セーラーの衿の大きく更衣
燕の巣新しきまま無人駅
風鈴に吊す短冊風を呼ぶ
夕薄暑かけ替へて見る温度計
おさなごのこはごは摘^{つま}まむかぶとむし

蛍雪譚 六甲

熱帯魚静かに色を醒ましおり

貝森 光洋

涼しげな熱帯魚を眺めていたら熱帯魚そのものが色を醒ますように見えて来、それを眺めているうちに気持ちしが熱帯魚の色に重なってくるのである。色が醒めるのは、褪せるのではなく、あるものがはつきりとしてきて、心静かになってくるのである。熱帯魚が醒ましてくれるのである。

夏焚火よるべなきもの持ちよりて 梶浦玲良子

「よるべなきもの」とはいったい何だろう？ 例えば「寄辺の水」（よるべのみず）と言って甕に入れて神前に供え、神霊を寄せる水がある。この寄辺の水にどこか通ずるものがあるとすれば、おそらく「よるべなきもの」とは神霊の寄ってこない物、すなわち頼りがいのない物ばかりを持ち寄って焚き物をするのである。ちなみに焚火は冬の季語だから、冬以外の焚火を詠むには、季節を冠して（掲句の場合は夏をつけて使う。（以下略）

六花集

六甲選

平居 滯子

頂の山名石の灼けてをり
夏野来て次の夏野へ踏み入りぬ
触れくれることなき髪を洗ひけり
絵巻物流し置かるる堂涼し
余白なく書かれし葉書原爆忌

大内 幸子

味塩の壇の中まで梅雨湿り
梅雨出水鯉の飛び越す洗堰
梅雨茸芝生に並ぶ兵馬俑
逆縁を歩幅にとどめ杖日傘
端居して姉の形見の解き物